

Nagoya Urban Institute News Letter

ニュースレター

アートと都市の祝祭

名古屋都市センター

2010.9 vol.85



ダヴィデ・リヴァルタ「馬」(長者町会場)

[特集]

世界アートの最先端と 名古屋のまちが響き合う

「あいちトリエンナーレ2010」とまちづくり

国内外131組が集結する 72日間の都市の祝祭

3年に1度の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2010」が、いよいよ開幕。絵画、インスタレーション、パフォーマンスなど多彩な現代芸術が、美術館だけでなく街なかにも出現する、美しくも刺激に満ちた都市の祝祭です。国内外131組のアーティストや団体が名古屋のまちに集結し、8月21日から10月31日までの72日間にわたって繰り広げる壮大な挑戦は、今後のまちづくりにも大きなインパクトを与えそうです。



来場者を乗せて会場間を運行するペロタクシー



草間彌生「命の足跡」(栄のオアシス21)

Contents

[特集] 世界アートの最先端と 名古屋のまちが響き合う	1~3
PERSON	4
私のお気に入りの場所	4
なごやのまち今昔	5
まちづくり活動助成団体紹介	6
名古屋都市センター研究成果	7
都市センターだより	8



愛知の文化芸術100年の 軸づくりめざす

「愛・地球博」を成功させ、自然の叡智の豊かな可能性を世界に向け発信した愛知が、それにとどまることなく、さらに国際レベルの取り組みをスタートさせました。それが、この「あいちトリエンナーレ2010」です。きっかけとなったのは、名古屋都市センターの最高顧問、松尾稔氏が座長を務める「愛知の文化芸術振興に関する有識者懇談会」でした。

そこで「文化芸術あいち百年の軸をつくる」をコンセプトに掲げ、戦略として「愛知ビエンナーレ」の開催を提言したのです。それは「あいち国際芸術祭（仮称）基本構想」として具体化し、2年に1度のビエンナーレでなく3年に1度のトリエンナーレとして実現の運びとなりました。第1回となる「あいちトリエンナーレ2010」の芸術監督に国際的な芸術イベントの第一人者、建島哲氏を招き、テーマを「都市の祝祭 Art and City」としました。

「あいちトリエンナーレ2010」は国内最大級の規模を誇り、美術館だけでなく都市の多彩な空間をステージとしていることに大きな特徴があります。それは、ふだんそこで暮らし働く人々や国内外から観光に訪れた人々とアートとの、スリリングな出会いをもたらします。既成の施設から解放されたアートは、新しい空間の中で思いもよらぬ輝きを放ちます。それは都市にときめきと高揚感をもたらす「都市の祝祭」なのです。

「変わりゆくまち」とアートの出会い

「あいちトリエンナーレ2010」は、愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、長者町、納屋橋を主会場としています。この中で地域全体が会場となり、また地域で積極的に取り組んでいるのが長者町です。このまちは、名古屋城下の碁盤割りの中にあり、戦後は日本三大繊維問屋街の一つとして発展しました。しかし長い景気低迷の影響を受け空きビル、空き店舗が目立つようになり、繁栄の面影を失いつつあります。

その反面、名古屋長者町織物協同組合や若手経営者らを中心に、積極的にまちづくりに取り組むエネルギーな地域でもあります。10年前にスタートした「長者町ゑびす祭り」は、今日広く知られるイベントとなり、空きビルを活用し新しい集客拠点とする「ゑびすビルプロジェクト」も進行中です。卸問屋だけでなく、小売店、飲食店、ベンチャー企業なども集まる、いきいきとした「変わりゆくまち」にしようとしています。

長者町はトリエンナーレをまちづくりコミュニティを育む新しいチャンスととらえ、全面協力しています。21のビルのそこかしこを会場として無償提供。草間彌生氏にデザインを依頼し水玉模様のリボンを作り、それを機会あるごとに手渡す「リボンプロジェクト」を展開。「長者町ゑびす祭り」のスケジュールと内容を調整し、ト



リエンナーレの連携イベントとしました。「変わりゆく長者町」はアートとの出会いにより、まちづくりのエネルギーがさらに大きく育とうとしています。

都市がアートを支え、 アートが都市を育てる

トリエンナーレは、名古屋のさまざまな都市空間をステージにしています。愛知芸術文化センター、オアシス21、中央広小路ビルを含む「栄エリア」、名古屋市美術館、二葉ビルが会場となる「白川公園エリア」、問屋街が全面的に協力する「長者町エリア」、旧ボウリング場が会場となる「納屋橋エリア」、前衛的な演劇・パフォーマンスの拠点セツ寺共同スタジオが会場となる「大須エリア」、開府400年で注目が集まる「名城公園」。こうした多彩な空



1



2

- 1 塩田千春「不在との対話」(名古屋美術館)
- 2 トーチカ「PiKAPIKAあいちプロジェクト」(長者町会場)
- 3 草間的水玉プリウス(長者町会場で撮影)
- 4 ラ・ロボット「Laughing Hole」(愛知芸術文化センター)
- 5 松井繁朗「チャンネル」(愛知芸術文化センター)

*1,3,4,5写真撮影:福永一夫



4



5

間がアートに新しい魅力を与えると同時に、アートは都市にこれまでない可能性をもたらします。今始まったばかりの、愛知の

文化芸術100年の軸づくりをめざす挑戦は、今後100年のまちづくりにも大きな影響を及ぼすことになりそうです。

アートの多様性を祝祭の中で楽しむ経験が 包容力のある寛容な都市形成へつながります

近年、現代美術の国際的イベントが国内外で開かれています。力を蓄えた大都市が、さらに文化的活力を吹き込もうとしているからです。では、なぜ今愛知で開くのか。愛知には産業力はもちろん、江戸時代から続く文化的伝統や風土もあり、荒川修作、河原温など国際的に評価されているアーティストとも縁が深い。現代美術に貢献する力も、アートのパワーを地域に吹き込む土壌もあり、現代美術の祝祭に最もふさわしい地域の一つなのです。

アートという非日常性は、日常の営みが行われる都市の中

では他者です。しかも色の感覚も形も文化も多種多様。この他者を祝祭的な高揚感の中で受け入れ楽しむのです。この経験は日常の都市に戻ったあとでも記憶に深く刻まれるはず。他者を受け入れ、多様性を認める文化。それは包容力のある寛容な社会の基盤となります。身障者や高齢者、あるいはマイノリティを隔離して効率的にコントロールする社会より遥かに健康的です。愛知、名古屋という勢いも経済力もある大都市がさらに輝き、世界にその魅力を発信することをわたしたちは願っています。

あいちトリエンナーレ2010 芸術監督
国立国際美術館 館長

たて はた あきら
建畠 哲さん

